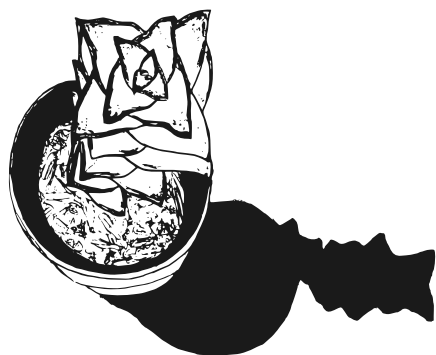


o d a i

magazine

vol.10



I/O View #1

このコーナーは、杉浦（以下、す）が勝手にお願いしてインタビュに伺い、そこから感じたアウトビュを綴る。そんなコーナーです。自分の思うオダマガの体裁上、こちらはすこしゆるく、もつと書きたいことはwebに書く感じかと思えます。

記念すべき第一回目のお客様は、フェスティバル FUKUSHIMA で新生相馬盆唄の歌唱でおなじみ、LIFEKU など多岐に渡り活動されている遠藤知絵さん（以下、え）です。

え：杉浦さんは確か3回くらいフェスティバル

FUKUSHIMA に来ていたと思いますか？

す：はい、3回です。

え：いつが初めてですか？

す：去年ですね。去年の11月の池袋の回に初めて踊りに行きました。

え：何で存在をお知りになったのですか？

す：店のお客さんです。池袋で一緒にいた人が、

わかりますかね。えっと…。

え：メガネをかけた方ですか？

す：そうです、彼が僕が盆踊り好きと知っていたので教えてくれて、最初は DOMMUNE で

中継を見て知ったという感じですよ。

え：そうなんです、ありがとうございます。

す：いえいえ、こちらこそ楽しんで頂いてありがとうございます。

え：ありがとうございます。遠藤さんはプロジェ

クト FUKUSHIMA 以外に LIFEKU でも活動

されていますが、LIFEKU とはどういったものなのでしょうか？

え：LIFEKU は「福島のスェットスタイルをきちんと発信しよう」ということで震災後お店をやっている人たちで立ち上げました。スタッフはみんなボランティアで動いていて、イベントを企画したり、こういったマップを作って町歩きを提案したりしています。

す：（マップを手にして）お、凄いですね。

実は僕もうちの店に来るルートとか近所を散策するためのマップを人に協力をいただいて作ろうとしてるんです。ただ、何を載せたらいいかというのを頭を抱えています。載せるべきか否かの線引きも難しいと思いますが、どのようにされていますか？

え：確かに線引きは難しいですね。行政が出している地図は全部載っているの地元の人

たちにはすごく便利なんですけど、福島に遊びに来たという人たちにとってはあまり

に情報が多すぎるので、自分たちのセンスでポイントを絞っています。

す：なるほど、ありがとうございます。確かに

手に取る側としては情報の系統が絞られていた方が便利ですね。

え：このマップもアップデートを重ねて今は9

号なんです、実際に手に取る人の反応や

表情が見えるので、そこがいいですね。

す：モノとしてあるというのは大きいですね。ありがとうございます。ではプロジェ

クト FUKUSHIMA にはどういった経緯で

参加されるようになったのでしょうか？

え：震災後に大友良英さんがプロジェクト FUKUSHIMA を立ち上げられまして、そこで同級生のアサノコウタくんがフェスティ

バル FUKUSHIMA で地面に敷いてある大風呂敷を中心となってやっていたんです。

わたしは彼の紹介でスタッフとして関わるようになりまして。

す：それに関わるようになってから、どうして新生相馬盆歌を歌うことになったのでしょうか？

え：これに関しては歌い手が見つからないってことでわたしに声がかかったんです。す：そんな経緯だったんですね。ちよつと想像とは違っていました。

え：そうなんです。実はさつきお話しした LIFEKU にしてもわたしは巻き込まれ系なんです。笑

それで、歌はそのとき1回きりだと思って引き受けたんですけど、まさかずっと歌うことになるとは思ってなかったです。恥ずかしながらそれまで相馬盆唄の存在は知ってましたが、歌詞の内容までは知らなかったんです。たまになんでわたしが歌ってるんだって怒られたりします。上手くもないですし。

す：いやいや、素晴らしいですよ。少なくとも僕はあの歌声で踊りたいと思いますから。それに大勢の前で歌われていて、度胸がある方だなと思っていました。

え：はい、母親にも言われました。あなたは度

胸だけはあるって。笑

す..遠藤さん自身、それぞれの活動に参加することで何か変化はありましたか？

え..本当に変わったと思います。福島を違った視点から見れるようになったと言うか。私は両親と一緒に設計事務所で働いているんですけど、従業員が家族だから当然忘年会とかもなく、福島の人たちもお客さまや業者さんくらいしか関わりがなかったのです..でも設計事務所のお客さんとなるとある程度バラけると言うか、特定の層というわけでもないですよ。

え..確かにお客さまは色々な方がいらっしやるんですけど、仕事の関係以上にはなりませんし。

す..なるほど。では違った視点というのは具体的にどうゆうところなんでしょう？

え..忘年会にしてもそうなんですけど、仕事で見る福島しか知らなかったのが、LIFEKUやプロジェクト FUKUSHIMAそれぞれ関わる人や対象となる人たちが違いますし、色々な福島を見れるようになったと言うか。あと、ひとりでは絶対にできないことができるということも大きいですね。人が集まればその分衝突も起こり得るんですけど、それによって考えも広がります。

す..それはいいことですね。僕は自分の町にどうゆう人が住んでいるのか未だに全然わかってませんから。仲間がいて、みんなを目的に向かえるというのは素晴らしいことだと思います。

え..大友さんがそういう多面性？自分のいる場所を幾つか持つとくのはいいことだと仰ってました。一ヶ所にすつといたら行き詰まってしまうみたい。

す..逃げ場がないと嫌なものに接する術がなくなってしまうからですね。そういった意味でも何か自分の外にある活動などに参加するのは意義がありますね。

え..みんなたまたまなんですけど、今はどれも続ける事が大事だと思っています。

す..単発で何かやるのは簡単ですけど、それはすぐ忘れられてしまいますからね。続けていけば少しずつでも認知されていくというのが自分の中でも実感としてあるんですけど、大事なことと思います。

え..今はなんていうんでしょう。実際やったことないしわからないんですけど、地元の消防団をやっているようなやりがいを感じます。ちょっとわからないかもしれないですけど、す..ああ、なんとなくわかる気がします。

え..話は飛びますが私は本当に音楽に疎くて、ポプマリーとライクアローリングストーンのポップ..す..ディラン？

え..そう、そのふたりが別人だつてことを昨日知ったんです。ピーター・バラカンさんのラジオ番組で流れて、母親に「この人レゲエでも有名だよね？」って言ったら、「え？あなた何言ってるの？」ってなつて。笑

⇨インタビュー⇨アウタビュー

遠藤知絵さんはとても気さくで聡明な方でした。場所は珈琲グルメという、遠藤さんが小さい頃からあるという老舗の喫茶店。遠藤さんオススメのババロアと珈琲を頂きながら。

何かをはじめた人も、巻き込まれた人も、共感の中で動いて、同じ方向を見て進んでいるのを感じました。それはまるで盆踊りのようです。思う。関わる。続ける。OKIのみつつが活動には大事かもしれません。

熱のあるものはとても魅力的で、東京の色々より全然面白いと思いました。皆さんも是非遊びに行ってください。片道4900円と高いですけど。何気に王子からJRのバス一本でいけます。遠ければ、フェスティバル FUKUSHIMAが東京に来た時に踊りに行きましょう。

LIFEKUについてはインタビュー後に色々伺ったのでブログに掲載したいと思っています。チェックラ <http://odabnucke.org/blog>



えいがのこと

イマジン（原題：Imagine）

14 ポーランド

監督：アンジェイ・ヤキモフスキ

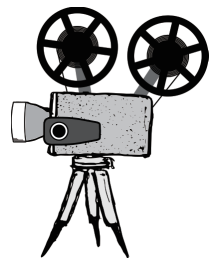
スチールを見てその映画を見たくなるのはよくあること。最近はずっとパソコンの画面で映画を見るというのが定着してきてしまったので久しぶりに映画館に足を運んでみました。と思った矢先に少し前に岩波ホールで蜂蜜農家の映画を観に行っていたのを思い出しました。その映画についてはまたいつか触れるかもしれませんが。さてさて話は戻って、今回はこのポーランド映画を観に飯田橋のギンレイホールに行きました。気になっていたものの初めて入る劇場で雰囲気もよく、料金も一良心的でした。

この映画は盲学校の話で、恐らく観ている人の中にはウクライナのろう学校の（以前このコーナーにも書いた）映画を思い出す人が多い

気がするんですが、視覚障害と聴覚障害では見える景色が全然違っていているようでした。視覚のない世界の方が豊かなように感じられました。

音のない世界。それは驚きの世界です。まさに箱の中の猫で、振り返れば何があるかわかりません。眼に映る映像がいくらうるさくても静寂の中です。一方、像のない世界も似ているようにだけど、実際には視覚に頼るよりも多くの情報を受けていて、目には見えないものを見ることができるともある世界です。

忙しい現代は物事が過ぎ去ってしましますが、それも感覚ににているような気がしました。視覚と聴覚の選択でもお国柄の違いがあるのかもしれませんがね。ポーランドとウクライナは隣国です。ただ、黄色いトラムの走るこの映画の舞台はリスボンです。



おしえて！



おだいじん

おひさしブリュッケじゃ。相変わらず疑問質問のお便りが来やせん。そんなこんなでまた寒い季節に戻ってきてしまいおった。

暇じゃから早めに大掃除を始めようかと思っておったんじゃが、突然お便りが来たぞよ！

埼玉県のSさんからの質問じゃ。「いいピアノの見分け方ありますか？おだいじん様 教えてください。」とな。

ふむふむ、Sさんはきつと何かに迫られていいピアノを見分けなといけないな。なんぢやらoooでいうところの大至急マークがついておるな。

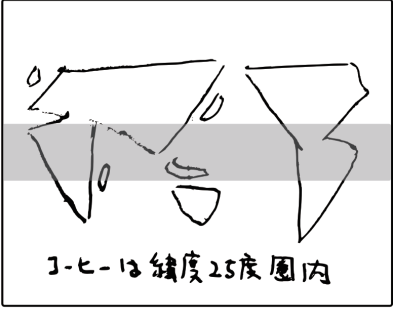
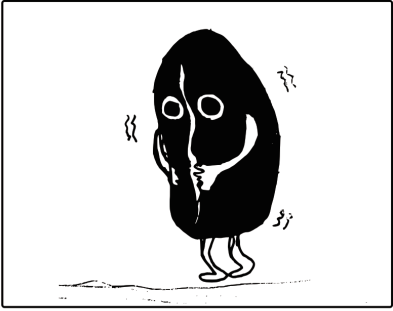
しかし、この冊子は早くてもひと月に一度しか発行されんから、答えを急いじゃノノノノ。

オッホン！さて、いいピアノ。ピアノの音は、響板で決まる。じゃから響板を見ればわかる。響板には

スプルスという木が使われておるんじゃ。建材では駄木とされるんじゃが、楽器には欠かせない木なんじゃぞよ。それで木の目には板目と柁目があって強度を強くするために柁目の板を響板に使っておるんじゃな。この柁目に見る線の間隔が狭く均一なほど音が良い。中でもルーマニアのスプルスはあまり日の当たらない山の谷間でじっくりと育つから目がぎつしりと詰まっておる、それはそれは上等な代物じゃ。スタンウェイのピアノなんかで使われておる。じゃから、アップライトピアノの裏を見て木目がなかつたらそれはもう：

どうじゃ、これがおだいじんの実力じゃよ。ふおつふおつふおつ。

疑問質問なんでもお便り待っておるぞよ！



小台のこと

小台（おだい）のことを少し紹介します。

子供を連れて大人から、子供同士、大人同士、いろいろな人たちが休日や平日を過ごしている。乗り物は、スカイサイクルが好きです。

そんなあらかわ遊園地には、不思議な場所があります。意外にも知らなれてないのですが、隅田川の川べりのヒーローショーとかやってるころ、アリスの広場に不思議ポイントがあります。半円形のステージになっているところのちよど中心のところ。あそこに立つと音の聞こえ方が全然違うんです。その半径30mくらいのスペースではすり鉢状になっている客席とどうか、段々から全部音が跳ね返ってきているのか、音を立てれば「わぁっ」と驚いてしまいます。

山のこと／風のうた

よく晴れた山の上。そよそよと、吹く風。そよそよは、日本が誇る擬音語である。どこかすやすやにも似て、眠りを誘う風だ。思わず僕はザックをおろして寝転がってしまった。前もなければ後もない。するとすべてがどうでもいような、寛容に満ちた心持ちになる。

心配も後悔もない世界。そんな心境があるのだなと思える。一切の騒音、雑音がない場所で聞こえてきたのが、風のうただった。17歳の8月のことだ。

風のうたは、山の上では今も時々耳にすることがある。それはひらがなのうたで、とてもなめらかに流れる、最良の世界の音楽なのだろうと思う。

ぼくはそれを聞いてうとうとし、やがてふらふらと起き上がったのは、またゆらゆらと歩き出すのである。

ある日の夢

駅ビルの雑貨屋にいた

緑のカーデイガンの人いなくなってしまうた見渡してもわからない

声をかけたかったけどかかれなくて

何か小さいものを手にとってレジに並ぶすると目の前にその人

レジの順番がまわってきたから紙にひと目惚れしました

とだけ書いてその人の後を追う

エレベーターで降りてホームにでる

多分あれだという影を追って走る

さつき紙に何も書いてないって気付いて階段を登る足はおぼつかなくて

128段の階段のうた 5段目

ベンチに腰を下ろして僕は5月の風と光をもてあそんでいた。これまでもそうだったし、これからもそうなんだろう、そんな気持ちで。でも空模様は移ろい、雨が降り出したりもするんだ。ポツポツポツと雨が落ち、僕はテクテクテクとまた歩き出す。傘がない身には雨はつらいんだ。

トリミング



写真・栗原論

日々は戻らない

都電に揺られている。ギターをしょって突っ立っている。窓の外を眺めながらこれからのこととかを考えたりした。

小台という街にはおもいがある。「ムアルバムをレコーディングしたスタジオがあって、そのリードトラックのビデオを撮影したのも荒川の土手だった。あの頃、大学卒業を控えた3月は、レコーディングの詰め込みでややランナーズハイな状態ながらも僕はなかなか充実した毎日を送っていた。音にはその時、その場所、そのひとにしか鳴らせないものがあり、楽譜上には見えない奇跡が起きうるものだ。それをパッケージするために、じぶんはよく「曲に手垢をつける」という言い方をするのだが、積んでは崩すの果てなき繰り返しの中に、これでいいのだという赤塚不二夫的啓示が降りる瞬間を掴むのである。荒川の土手に初めてあがった時、夜の街が浮かび上がり、向こうに舍人ライナーが走っていくあの感じは間違いなく作品に落とし込まれた。

僕はまた新しい街に引っ越す。日々は戻らない。しかし楽しいことを考える時、街は輝く、そして見えない力が味方するのだ。そんな気がする。

■おだいのわたし (9) 『死者の書』によせて

中村安伸

近藤ようこさんによる漫画版の『死者の書』（原作 折口信夫）上巻が刊行されたので、早速読んでみた。

作品全体の半分にししか触れていない段階で判断することは困難だが、原作に忠実でありながら、非常に読みやすい、文学性とエンターテイメント性をそなえた素晴らしい作品であると感じた。

独自のエピソードが追加されている箇所はほばないのだが、漫画ならではの表現で、物語の背景がより立体的に伝わってくる。

私が最も感心したのは、エピソードの順序を大きく変更している部分である。私は『死者の書』をはじめて読もうとしたとき、途中でつまづいてしまったのだが、この順序の変更によって、その原因に気付かされた。ネタバレを避けるため具体的には書かないが、近藤さんの作品はその部分を見事に克服しているのである。

原作を読んだうえでこの漫画作品を読むと、漫画という形式がいかに可能性に満ちているかということが実感される。裏返せば、作者の眼前につねに多様な選択肢が用意されているということであり、それはむしろ苦しいことなのかもしれない。

ひとくちに「原作に忠実」といっても、どのような場面でのような表現方法を選ぶかというところに、作者の個性があらわれ、作品解釈の軸が問われるのだろう。

とくに重要な場面においては、ある表現を選択することによって、他の素晴らしい表現を捨ててはならない作者の、苦心のあとを感じてしまうのである。

ところで、9月26日にBRÜCKEにて開催が予定されている『死者の書』によせて」というイベントは、大野円雅さんによる企画で、折口信夫の『死者の書』を朗読つき歌曲に翻案したものを披露する予定である。朗読のテキストと歌曲の詞は、原作から抽出した言葉をもと

にして、私が構成する。歌曲の作曲は今井飛鳥さん、歌唱は大野円雅さん、朗読は私が担当することになっていて、Gedoさんによるピアノソロも織り交ぜた、数十分程度の作品になると思われる。

大野さんから声をかけていただき『死者の書』を翻案することを思いついた段階では、近藤さんの漫画作品の存在は知らなかった。

しかし、この企画に先立って漫画化が進められ、イベント開催のぴたり一ヶ月前に上巻が単行本化されるというのは、偶然ながら素晴らしいタイミングであると感じた。そして、この『死者の書』をふくむ近藤さんの原画展が、ちょうどわれわれのイベントと同時期に開催されるという。

さて、この『死者の書』の舞台である二上山への思い、また、この作品の翻案という取り組みにあたっての私の心がまえについては、イベントのブローシャーに掲載した文に書かせていただいたとおりである。ここではその補足として、この夏に当麻寺に詣でた折のことを書いておきたい。

この作品の最大のモチーフである當麻曼荼羅が、本尊としておさめられている当麻寺は、二上山のふもとに位置している古刹である。

私の実家からは、車なら30分ほどで行ける場所であるにもかかわらず、私は今回はじめて訪れたのであった。

8月1日、正午近くの照りつける太陽を、境内の白砂が照り返して、身体も意識も蒸発してしまいそうな暑さである。曼荼羅の納められた本堂に入ると、そこはひんやりとした広い薄闇の空間であり、急激な環境のコントラストが、一種のトランス状態に近い、かるやかな興奮をもたらした。

厨子に納められた當麻曼荼羅は、4メートル四方という巨大な仏画である。中将姫の伝説が残る根本曼陀羅そのものではなく、中世に複製されたものとのことであるが、やはり退色が進んでおり、また、蠟燭とわずかな日光のほかには照明がなく、闇にまぎれそうな細部の描線や彩色を目にやきつけるためには、丹念に、時間をかけて隅々を観

察していく必要がある。

曼荼羅という名で呼ばれているが、密教のそれとは無関係である。実際には阿弥陀如来を中心とした、西方極楽浄土を描いたものである。当麻寺が奈良の都の西方、日の没する場所に位置していることと深く関係しているだろう。

この仏画は非常に巨大でありながら、つぶさに観察すると、多くの仏の姿が細密に描きこまれてあり、また立体感のある構図も特徴的である。作成にあたって非常に大きな労力が払われたことを感じさせる。これを中将姫が蓮糸を使って一夜で織り上げたという伝説を合わせて考えてみると、その不思議さに圧倒される。

おかしな言い方かもしれないが、今ほじめてこの曼荼羅を見るためにこそ、これまで私は当麻寺を訪れなかったのかもしれないと思った。

そして、近藤ようこさんの漫画作品と出会ったのが、ちょうど今回の骨子をまとめたタイミングだったというのも、やはり不思議なめぐりあわせであろう。

近藤さんの漫画作品と私たちが作ろうとしている作品とでは、まったくアプローチが異なっているが、どちらも折口信夫の『死者の書』という、同じひとつの大海から掬い上げたものであり、近藤さんがあとがきに、自らの作品を入り口にして、最終的には原作に触れてもらいたいという主旨のことを書かれているが、私の思いもほぼ同様である。

今回の企画において、なにかを実現しようとしている私の意図などは、ごく小さなものである。

さまざまな運命の蓮糸が織り上げられていくばかりなのだと考えると、日本文学史上屈指の名作に向き合うというプレッシャーも、すこしは軽く感じられる気がする。

■足立区小台とはとくに関わりのない八月の俳句

戦争が廊下の奥に立ってゐた

季語のないいわゆる「無季俳句」であるが、やはり戦争といえは8月と結びつけて考えてしまうのも季節感の一つだと思う。次の戦争が起こったら、この季節は塗り替えられてしまうのだろう。

私は以前この句を、日常の隙間に「戦争」が入り込み、何くわぬ顔をしている、というように解釈していた。その読みを捨てるわけではないが、今ではもう少し突っ込んで、次のような解釈のほうが適切であるような気がする。

この句の「廊下」は、民家の短い廊下ではなく、学校や病院などの長い廊下を思い浮かべたほうがふさわしい。

誰かに強制されるわけではなく、自らの意思で選択した（もしかしたら無意識のうちに選択させられたのかもしれない。）経路として、その廊下を進んでいったところ、その先に「戦争」が立っていた。廊下に立っているのだから人の姿をしているのだろう。

この句に描かれている「戦争」の姿として、軍服を着たのっぺらぼうというような、不気味で暗示的な存在を思い描いたこともある。しかし、抗いがたい魅力も備えた、美しい姿をしているのかもしれないと今では思う。

今また、かつてと同じように戦争への道を歩んでいるのだと言う人がいる。その一方で、悲惨な戦争への嫌悪感が根強く存在する以上、その道を繰り返すことはないだろうと思う人もいるかもしれない。しかし、われわれは戦争を避けようとして、結果として戦争への道をたどらないとも限らない。

もしかしたら、今はまったく別の名で呼ばれているものの正体が、実は「戦争」なのかもしれない。

たとえば「平和」と呼ばれているものが「戦争」であるということも、なには限らないのである。

※作者は渡辺白泉（1913年3月24日〜1969年1月30日）

荒川喫茶瞥々

小台マガジンも創刊からもう一年が経ちますね。このコラムも気付けば10回目です。いままでの記事を見返してみると、荒川区の喫茶店が4回、台東区も4回、文京区1回で、タイトルに偽りの感が否めませんが、今回も台東区の喫茶店をご紹介します。



駒形橋から上野駅へ向かって進む浅草通りは、仏壇屋ばかりが軒を連ねていて普段はあまり用事のない場所ですが、のどかな街並や密集した寺社のおかげで、散策にはけっこう適しています。とくに下谷神社周辺は、昔の建物がまだ健在で、古き良き下町の雰囲気を残す貴重な区域です。



今回訪問した「Coffee ヤマ」は、下谷神社から徒歩10分ほどの路地に存在します。外観は普通の民家のようにですが、注意して見ると、入口や窓の構造、看板の書体などかなりの意匠性を感じます。内装も期待以上の出来で、床の模様や電球、天井などがバウハウスっぽい幾何学的なリズムで統一されていて心地よい緊張感があります。タイル貼りの和式トイレはもはや昭和喫茶の様式美と言ってよいでしょう。しかし現

在ではこの店のような砂壁は貴重かもしれません。オーダーはサイフォンのブレンドです。わずかな酸味のある、美味でとても飲みやすい珈琲でした。

◆オーダー

ブレンドコーヒー 360円

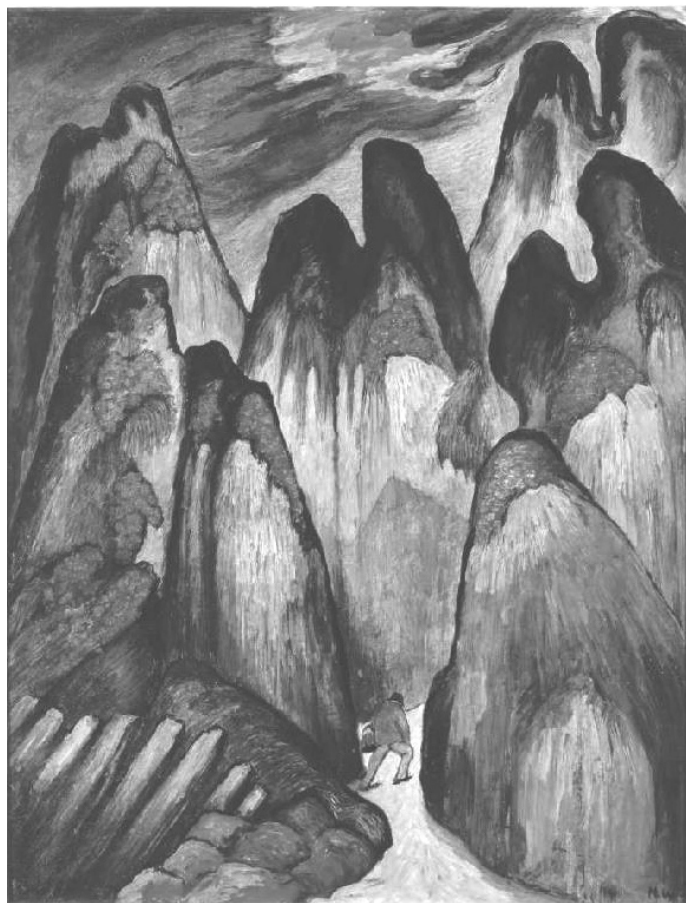
◆店舗データ

「Coffee ヤマ」

東京都台東区東上野三丁目32-6



NIGHTMARE PICTURES



“Le Forfait”

マリアンヌ・フォン・ヴェレフキン

19世紀から20世紀初頭に活動した、表現主義の女性画家。ロシアに生まれ、のちにドイツへと移住しました。

ダンテの地獄を思わせるような荒涼とした風景ですが、なにか生々しくネットリとした空気感の立ち込める絵です。

タイトルは「罪、代償」というような意味だそうです。



店主の手記

コーヒー屋なのでコーヒーのことも少し書いてみようと思います。ご存知の方もいるかと思いますが店のコーヒーは自家焙煎です。焙煎とはコーヒーを煎る作業です。コーヒー豆と言うと茶色い小豆くらいの豆が思い浮か

ぶかもしれないですが、これは肉でいえば焼いた後のものです。肉も焼く前と後で色が違うように、コーヒーも違います。生豆の状態では種類、処理方法、水分含有量が多少色味が違ったりしますが、薄く薄い緑色をしています。それを熱を加えて茶色くします。焙煎はコーヒーの味を大きく左右します。ダンプボールのような色の浅煎りだと酸味、マックロク罗斯ケのような深煎りは苦味。という具合です。おそらく一般的にはコーヒーのイメージは深煎りで、苦みやコクが云々、とウェーブと呼ばれ、シングルオリジン(単二豆)のスペシャルティコーヒーの称号を得た豆を浅煎り、中煎りくらいでコーヒーが本来持つフルーティーな味わいを楽しもうという流れがあったりします。清澄白河あたりは盛んですね。ロースターも沢山できました。ちなみに私は後者が好きですが、どちらもコーヒーの楽しみ方です。自分がうまいと思うかどうかだけです。ここで、焙煎手法もまた鍵を握りますが、酸味と甘みを引き出すには直火式での焙煎が必要だと最近感じています。今まで半熱風式のみでしたが、今後は手網での直火焙煎も取り入れて、豆によって使い分けて

いこうと思います。一応、サードウェーブと呼ばれる界限では半熱風が主流なのでこの感覚は間違いかもしれません。

写真は橋と音楽 vol.15 のもの。 oono yuuki さんは近所の扇のあたりに友人がいたとか、ラッキーオールドサンのお二人はアルバムのレコーディングを小台のスタジオでしていたとか、他にも小台やこの近所にゆかりのある方がちらほらいて、ちよつと驚きました。

今回は店を二ヶ月休んだのでその前にいただいている記事も載っています。健康には気をつけていきたいものです。

小台マガジン vol. 10
2015年 11月
編集・印刷 ブリュッケ

BRÜCKE
≈ U